

# 俳句集

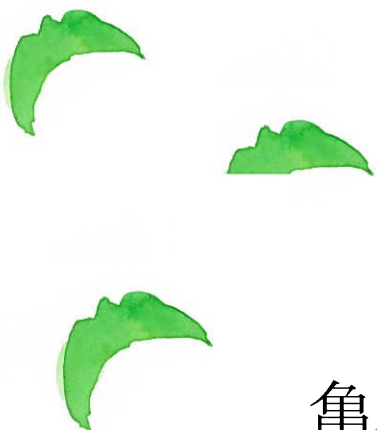


令和二年度 第十六回

亀山市民俳句会

(応募句 一般の部)

主催 亀山市・亀山俳句会



選者

宮田正 和先生

石井いさお先生

上田佳久子先生

とき 令和二年十月二十四日(土)

ところ あいあい 二階大会議室

受賞俳句

《一般》

市長賞 新涼や切り絵にカッター入るる音

市議会議長賞 焼きたてのパンの弾力涼新た

教育長賞 ストラップの小鈴ちりりと夜涼し

芸術文化協会会長賞 風つれて移るかなかな塞の神

秀逸 秋夕焼一に戻りて数へ唄

秋暑し街にあふるるカタカナ語

線香花火まだまだと見つめをり

すぐそこと言はれて遠し白木槿

鮎釣りの一人一竿川に入る

佳

作

遠 蝸 母 の 手 垢 の 残 る 椅 子  
帰 省 の 子 父 よ り 大 き 靴 脱 ぎ て  
旅 人 と 並 ぶ 足 湯 や 夕 紅 葉  
二 の だ ん と 五 の だ ん 唱 え 小 鳥 来 る  
み づ う み の 雨 脚 太 し 稻 光  
蟬 し ぐ れ バ ス の 来 る ま で 繰 る 絵 本  
母 の 手 に ふ れ て 眠 る 子 望 の 月  
ひ と 雨 の 峠 の 径 や 月 涼 し

# 応募俳句

秀 逸 1 秋夕焼一に戻りて数へ唄

一等は靴の脱げし児運動会  
山川の息ととのふる豊の秋

教育長賞 2 ストラップの小鈴ちりりと夜涼し

諷経よし夏うぐひすも学僧も  
うぐひすのけきよと結びて夏畢る

3 しばらくは壺に差しおく秋団扇

流れゆく枝の小舟に糸蜻蛉  
秋澄みて塔の影伸ぶ心地池

4 秋の蚊につき纏わるるひと夜かな

七輪の煙を返し秋刀魚焼く  
杖に身をあづけて仰ぐ翳雲

佳

作

5 帰省子のいきいき話す笑顔かな

遠蝸母の手垢の残る椅子

初採りの茄子のむらさき母に供ふ

6 部活の子朝の挨拶稲の花

亡き父の残せし硯洗ふ朝

秋団扇師の一文字のいきいきと

7 新涼や学童の声筒抜けて

南瓜うまし爺は村の人気者

法師蟬せかさされ親し真似てみる

市長賞 8 新涼や切り絵にカッター入るる音

秋海棠ひと日しづかに昏れゆける

朗らかや話上手に生身魂

佳

作 9 帰省の子父より大き靴脱ぎて

汗の作業着疲れも共に洗ひゐて  
汗かきて大き泣き声嬰育つ

10 丹念に墓洗う吾子定年す

腹みせて蟬は命を終えにけり  
茄子乗せて熱い一輪引いて帰りぬ

佳

作 11 旅人と並ぶ足湯や夕紅葉

落鮎や逆らはずして掬はれし  
秋灯下手間隙かかる針の穴

佳

作 12 新米のにぎり片手に語る夢

二のだんと五のだん唱え小鳥来る  
米寿なる祖母も歌へり月今宵

13 夕涼し肩車して子の笑顔

稲穂波空響かせてコンバイン  
縁前で済ます棚経午下の風

14 パツチワークめく一望の早稲晩稲

天守なき城山あぶれ蚊のひそと  
秋暑し街にあふるるカタカナ語

秀逸

15 日めくりは処暑とありけり畳拭く

颱風来多目に飯を炊き上げて  
衣被つるりと一句授かりぬ

芸文協賞

16 風つれて移るかなかな塞の神

揺れ交はす今日の重みの百日紅  
唐辛子華やぐ子等のプランター



佳

作

17 帰省して水ていねいに使ひけり

一枝守り翅休めゐる赤とんぼ

みづうみの雨脚太し稲光

18 体重計る風袋としてあっぱっぱ

水汲むは子供の仕事白木槿

大根蒔く腰の軍手の落ちさうな

19 わが一路つゆも悔いなし夏つばめ

鈴蘭や亡妻に似る子の片えくぼ

蟬しぐれバスの来るまで繰る絵本

佳

作

20 月見草警戒水位すれすれに

空は空いろ水は水いろ原爆忌

焼きたてのパンの弾力涼新た

議  
長  
賞

21 稗引くや昏れて自転車置きしまま  
早世の父訪ふ頃や百日紅  
病み抜けの父を囲みて衣被

22 放し飼ひの矮鶏搔く花壇鶏頭花  
廃校の茶房の窓辺小鳥来る  
新涼や茗荷汁てふ御御御付

23 岸辺まで続く木道鬼やんま  
打水に風の湧きたつ夕まぐれ  
尼寺の小さき潜り戸月見草

24 見晴台に風の集まる花野かな  
秋の暮砂場に砂の飯残り  
一木の螺旋に揺るる野分かな

佳

作 25 母の手にふれて眠る子望の月

新豆腐土産の地酒さげて来る  
熟寝の子らは手足重ねて秋夕焼

秀

逸

26 鈴虫鳴くクレッシェンドのハーモニー

線香花火まだまだまだと見つめをり  
コーヒーの香り澄みけり今朝の秋

秀

逸

27 すぐそこと言はれて遠し白木槿

水門の錆たハンドル赤とんぼ  
波の打つ継ぎ接ぎの道残暑かな

28 濁る水更に緋になる夏出水

風に乗り空に溶けたる秋あかね  
熊手打つ土の堅さや秋暑し

29 豆腐屋のラッパに走る暑き路地  
長き夜や母の着物をほどきゐて  
雷鳴にたまご御飯を掻き込んで

30 初秋や手術の無事を伝へ聞く  
路地抜くる風の乾きて涼新た  
秋の蚊を払ひて奥へ帯曲輪

31 売られゆく牛に手を貸す今朝の秋  
いつしかに風満つ丘や蕎麦の花  
峡空や田舟ぐらりと晩生稻刈る

32 素っぴんのままの日多し髪洗ふ  
厨子の奥扉に這うる守宮かな  
新涼や電話の声の弾みおり

33 ひと雨の峠の径や月涼し

草深く吹かるる芒手折りけり  
薫風や鯉百才の泳ぎっぷり

34 シヤンソンの流れる茶房秋の夜

秋茄子の紺鮮やかに光りをり  
朝食のスープに浮かぶパセリかな

35 帰り道林の風と蝸と

夕立や君に渡して走り去り  
料理みてこれはビールとグラス出し

36 コロナ禍や逢わずに帰る盆の客

秋あかね一匹見つけかくれんぼ  
打ち水やたちまち乾くアスファルト

秀

逸

37 猛暑日や生活リズム追いつけず

漬物を手のひらにのせ新酒呑む

鮎釣りの一人一竿川に入る

38 夫留守の虫の音響く仏間かな

新米の入荷山積み香ほり立つ

三更の闇をつらぬく虫時雨